



会津放射能情報センター NEWS

住 所：〒965-0877 福島県会津若松市西栄町 8-36 Tel & Fax：0242-23-9401
開館日：水木金曜 10 時～16 時 第 1, 3 土曜 10 時～12 時（国民の休日は除く）
E-mail：info@aizu-center.org 公式 blog：http://ameblo.jp/mamorukai-aizu/
Web：https://aizu-center.org



2022 年 12 月 15 日発行

第 41 号

会津放射能情報センター

検 索

続く繋がりから心から感謝して

～情報センター 12 年目のご挨拶～

会津放射能情報センター代表 片岡輝美

■測定を続ける大切さ

春になると食卓を賑わすコシアブラは山菜の女王と呼ばれ、その美味しさは格別です。しかし、放射性物質を吸収しやすいため、今も福島県産は出荷制限がかかっています。野菜直売所で販売されていたコシアブラは「山形県産」との説明でしたが、測定結果は 256Bq/kg となり、汚染は広く拡散していることを、改めて自分たちの目で確認したところです。

同じ検体でも測定する度に数値は変化するため、ある数値が絶対ということにはなりません。だからこそ事実を確認し判断するために、第 12 期も空間や土壌、食品などの測定を重ねていきます。

■聴き続ける大切さ

5 月、大熊町の女性おふたりからお話を聴く会を持ちました。子どもや学校が大熊町の復興のシンボルとなり、彼ら彼女らが廃炉を含む今後の福島を担う人材となるために、教育現場が拠点となっていきます。住民の帰還は喜ばしいことと報道されますが、それが全てではありません。福島の有り様をどの観点からどのように考えるのかという出発点は、その課題の渦中にいる人、課題に向き合っている人の語りを聴くことにあると考えます。今期も機会を作り、聴くことを大切にしていきたいと思います。

■伝え続ける大切さ

第 11 期、私はオンラインと対面式を含め 5 校の中学校や高校、大学で福島の現状を報告し、センターは大学生や院生、教員など若い世代を迎えました。

11 月、横浜市・捜真小学校で原発核事故により今も悲しみや不安が続いていること、だからこそ、いのちが守られる社会を一緒に作る大切さを全校生徒に話しましたが、子ども達の質問には本当に驚きました。「放射性物質って何？ どこにたまるの？ いつかなくなるの？ 事故が起きて、人々が悲しい思いを

するような原発をなぜ作ったの？ 横浜は大丈夫？」など、核心を突いたものばかりだったからです。

つまり、子どもや若者に汚染水は安全だなどと刷り込むことに躍起になっている政府や東電は、子ども達の考える力を見くびっているのです。私たちは廃炉作業や被ばくの影響、環境汚染などあらゆる負担を次世代に残していきます。被害や影響の深刻さに驚きつつ、考え悩みながら現実を真正面から受けとめようとする若い人々を前に、大人が歩みをとめるわけにはいかないと強く思われています。

■目に見えない働きを担いつつ…

センター設立から数年間は自主避難者や会津地域の市民が多く来館していました。しかし、多くは自宅に帰還し、県外に避難した方もいます。会津地方の市民も日常生活に戻り、来館者は減少。目に見える状況で比較すれば、活動が縮小したのでは…と考え、予算の消化具合で活動の評価をしがちです。しかし、センターは子ども脱被ばく裁判の会の事務局として同裁判を支え、また他団体と繋がる代表をバックアップするなど、目に見えない働きを担っていることにも心に留めていただきたいと思います。

次々と露わになるいのちや人権を蔑ろにする現実に対峙する度に、私たちは誰と共に何を最も大切にするのかが問われ、動きを生み出すことが求められていきます。

長きに亘るみなさまのご支援に心から感謝いたします。第 12 期もいのちを守る仲間として共に歩みましょう。



▲ 10 月 22 日に若松栄町教会と Zoom でセンター総会を開催。

海といのちを守るタウンミーティング in 会津

「原発構内の止水について」

柴崎直明氏（福島大学教授・水文地質学）

10月22日、海といのちを守る福島ネットワークとの共催で柴崎直明氏講演会を開催しました。いくつかのポイントを報告いたします。（報告：片岡輝美）

■建設当時から大問題だった地下水

原発が建てられた場所は、かつては標高30～40mの地下水の豊富な台地だった。それを削り海岸を埋め立て、標高8.5mの原発敷地と標高2.5mの埋め立て地盤が造成された。そうすると当然建設当時から膨大な量の地下水が湧きだし、排水するために急ぎ井戸や側溝、パイプが設置された。

建設後も地下水は大問題だった。特に建屋周辺の水位を下げる必要があった。地下水位が高いと建屋が水力を受けて不安定になってしまうからだ。1～4号機の周囲に57本の井戸・サブドレンが設置された。事故前、その井戸からは平均して1日約700トン余りの地下水が、さらにその他の施設でも約640トンの地下水が汲み上げられ海に放出されていた。

このように福島第一原発敷地は決して原発建設に適した地ではなかった。ではなぜ選定されたのか。それは首都である東京から遠いことと人口密集地帯から離れていることが理由。電力供給網の外側にある一方で首都圏に送電できる距離にある福島が狙われたのだ。

東電が調査事務局を大熊町に設置したのが1964年12月。その僅か1年半で1号機の原子炉設置許可申請が提出され、その申請から許可がおりるまでは半年。つまり「原発建設ありき」で進められたことが分かる。

東電の地質調査も杜撰であった。柴崎氏が率いる福島第一原発地質・地下水問題団体研究グループ（原発団研・2015年2月に発足）の調査によれば、東電が公表していた砂の層は水の通りにくい泥岩が複雑に存在していることが明らかになった。国や東電が建設前から正確な調査をしていれば、事故後の地下水流入対策も大きく変わったと考えられる。

■効果が見られない切り札

2013年、相次ぐ貯水槽やタンクから汚染水が漏れいする事故が起き、国や東電は汚染水を「取り除く・漏らさない・近づけない」の汚染水対策をまとめた。「近づけない」対策は原子炉建屋周辺への地下水流入の減少を目的とし、その切り札として地下水バイパスと陸側凍土

遮水壁の設置が行われた。しかしその効果はほとんど表れていない。先述したように東電が砂だと思っていたところが泥の層であり、泥からほとんど水を汲み上げることはできない。よって地下水バイパスの効果はない。

また凍土遮水壁は1～4号機の周囲に約1550本のパイプを打ち、それを凍らせて氷の壁を作り地下水の流入を止めることを目指したが、その周囲の170箇所には配管や構造物が埋まっているため、凍結管（長さ約30m）を透水層まで突き通すことができない。原発団研の調査では深度30mより更に深いところに透水層が分布していることが明らかになり、十分な遮水はできていないことも分かった。

凍土遮水壁の効果も限定的であり、このままでは汚染水の発生を食い止めることはできない。

■新たな対策「広域遮水壁」の提言

原発団研は新たな対策として「広域遮水壁」を提案している。これは地盤を掘削しながら、その土とセメント系混濁液を混合して、延長約3.7km 厚さ90cm 深さ35～50mの地中連続壁「ソイルセメント」を構築して、山側から流れてくる地下水と建屋敷地内に湧き上がってくる地下水を遮水する。施工には数年を要するため、集水井（しゅうすいせい）による対策との相乗効果を勘案して行う。

この広域遮水壁は沖縄・宮古島で既に行われ、また集水井は福島県西会津の地滑り対策に用いられているなど、実績がある。

効果が出ない凍土遮水壁の総工費が345億円、電気代が年間十数億円に対して、広域遮水壁は凍土壁の半分以上で行える。とにかく増える汚染水をゼロにすれば、今貯蔵されている汚染水は海洋放出する必要がない。いち早く抜本的

な対策を取るべきだ。

■情報やデータを出さない東電の体質

汚染水問題が頻発した2013年、水文地質学の専門家として柴崎氏は福島県廃炉安全監視協議会専門委員に任命され、提言や質問などを行っているが、様々な困難さを感じている。

福島第一原発敷地内は第三者が自由に入って地質や地下水の調査をすることができない。また隣接する地域も帰還困難区域のため、地元自治体の許可なしには現地調査が行えない。そのため東電や国は地質や地下水、地盤に関する資料やデータなど全て情報公開する必要があるが、東電はオリジナルの詳細なデータはおろか、限られた資料や簡略化した資料の提出も出すことがない。これでは国や東電は不都合なことを隠しているのではないか

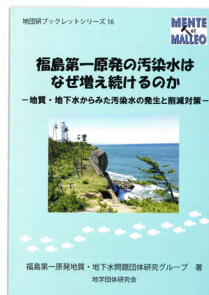


と疑ってしまう。一刻も早く、長期使用に耐えうる信頼性の高い抜本的な地下水流入削減対策を実施する必要がある。

■同日の柴崎氏ご講演はネットでも視聴可能です。YouTube 動画は右。

その他、下記ワードで検索してください。

『福島・発』海といのちを守るタウンミーティング in 会津



■ブックレット『福島第一原発の汚染水はなぜ増え続けるのか～地質・地下水からみた汚染水の発生と削減対策～』（1冊 100円）をご希望の方は会津放射能情報センターまでご連絡ください。

暖かいお帽子をありがとうございます！

宝塚市・熊野ナオミさんから、今年はお手製のお帽子と一緒に油絵『帽子の子どもたち』が贈呈されました。長年に亘るご支援に心から感謝いたします。熊野さんからの便りとセンターからのお返事を紹介します。

片岡輝美さま

片岡輝美先生にお目にかかれたのはただ一度きりで、そのあともう一度是非お逢いしたかったのですが、お知らせを頂いて甲東教会でお目にかかりたく思ったのに叶いませんでした。申し訳ありません。

私が「帽子」を編み始めたのは、1992年ボスニア・ヘルツェゴビナで内戦があり、荒れた街で水を汲みにゆく子供たちが雪の中、色とりどりの帽子を被っているのを見たからです。甲東教会とご縁のあった中国 咸陽の教会へ送り始め毎年20個ずつ送っておりましたが、3月11日のあの日以来、咸陽の方にはお話ししてフクシマへ送ることにさせて頂きました。今年91才となり、もうこの楽しい嬉しい「帽子編み」はお仕舞いにさせていただきます。

2011年のクリスマスからでした。楽しいお返事やお写真を、また皆様のご丁寧なお便りなどたくさん頂きました。

このための「毛糸」は私はまことに、“神さまのキセキ”と思っています。私自身の残り糸で始めましたけれども、一度もお金を出して買ったことはなく、頭に載せるものですから、「新しい残り糸」ということで本当に沢山の方々からいただきました。まさに『奇跡』と思います。感謝しかありません。

輝美先生のお働きがどんなに貴いものか、よくわかりますけれど、それがゼロになる日が来なければなりません。どうぞセンターの皆様も、お身体にお気を付けてがんばってくださいませ様に。

終わりにひとつお願いがあります。私は可愛い人たちの絵を描きました。宝塚市の展覧会で入選しました。ネコは私のネコです。大きくて（30号）すみませんが、どうか教会のスマに置いてくださいませ。

2022年11月12日 熊野ナオミ

□

□

□

熊野ナオミさま

毎年寒くなる頃に色とりどりのお帽子をたくさんお届けくださり、ほんとうにありがとうございます。多くの子どもたちがワクワクしながら手に取り、暖かい帽子をかぶって笑顔になります。既に受け取ったお子さんたちのお写真を同封します。

ちょうど1才になったSさんのお孫さんにはあつらえたようにぴったりですし、5才の女の子が何の迷いもなくサツと

選んだお帽子はお洋服にあった色合いでした。

このお帽子に長い歴史があったこと、お手紙で初めて知りました。熊野さんの平和への思い、子どもを守りたいとの思いが一針一針に込められていたことを伺い、身が引き締まる思いです。温かく柔らかな色合いのお帽子を受け取った咸陽の子どもたちはどれほど嬉しかったでしょう。自分を大切にしてくれる人の存在は、成人しても心の奥底に大切な思い出になっていることと思います。そして会津放射能情報センターにつながる子どもたちや親御さんにとってもこのお帽子は自分の心も身体も温めてくれた大切な存在です。

またこの度は「お帽子をかぶった子どもたち」の絵をご寄贈くださり、深く感謝いたします。2019年8月の甲東教会での集まりでは直接お目に掛かることは叶いませんでしたが、この絵が教会に掲げられ、私たちを出迎えてくれました。この度、その大切な絵をお届けくださったことで、ほんとうに嬉しい再会が実現しました。これからは会津放射能情報センターに来館する方たちをお迎えすることになります。熊野さんのお名前、宝塚市展で入選されたこと、このお帽子の歴史も合わせてご紹介したいと思います。

私たち夫婦が熊野さんご夫妻に最初にお目に掛かったのは、2011年春の終わり頃、その年の夏の保養プログラムの打合せで伺った西宮公会教会だったと記憶しております。その出会いから10年以上の年月が流れました。長年に亘り、私たちを祈りに覚えお支えくださったこと、どのような感謝の言葉も足りないと思います。また「新しい残り糸」をご準備くださった皆さまにも心から感謝申し上げます。いくつもの「神さまのキセキ」が繋がっていること…、ほんとうに不思議です。

これから寒さに向かいます。くれぐれもご自愛くださり、喜びのクリスマスをお迎えください。時が整えられれば、お目に掛かり感謝を申し上げたいと心から願っております。

2022年11月19日

会津放射能情報センター 片岡輝美



■ 2022 年 9 月～11 月の感謝報告 ■

いつもセンターの働きをお憶えくださり、ありがとうございます。年会費および協賛金をお届けくださった方を記載しています。特記なき教会伝道所や教区などは、すべて「日本基督教団」です。万一記載漏れなどがありましたら、お手数ですがご連絡ください。9 月 21 日～11 月 30 日の受付分となります。(敬称略・到着順)

■個人

藤原秀徳、大倉一美、矢野寛子、富塚元夫、小林由美子、山口 朗、山崎知行、北野直子、岩橋幹也、安藤節子、飯沼敬子、遠藤浩二、小寺秀一、高田順久、熊谷沙蘭、佐久間 愛、横山義弘、横山恵子、斉藤操子、安孫子発代、谷岡賢一、沖田忠子、岡田敦子、田中暁美、大関由佳里、加藤ひろ子、酒井恭子、野木晃子、佐藤美穂、河原田美哉子、博田章雄、渡部明江、林 京子、高橋雅子、長谷川敏夫、福田正美、渡部政子、中越洋子、中村光一、白井康之、赤城敬子、飯沼一元、ロブ ウィットマー、圭子 ウィットマー、稲垣悦子、大橋悦子、渡部里美、宮崎義章、前川圭子、山本潤子、内藤新吾、木村愛美、安井修二、佐々木昭代、高橋真美、西川幸作、五十嵐こす恵、小林 休、及川尚一、片岡謁也、片岡輝美、ジャイルズ 恵、梅津庸子、今田かおる、大竹桃子、石川雅子、杉岡ひとみ、多田玲一、五十嵐 進、中川 秀、加藤千代、及川由美子、中沢 譲、佐々木君江、小出敏市、福知千恵、齋藤久美、辻澤悦美、加藤陽子、安間てう子、長坂恭子、上地 武、栗山文昭、小坂橋秀見、立岩秀彦、佐久間美千子

■団体

甲東教会エリコの会、ぶどうの木保育園、上岩出診療所、福島移住女性支援ネットワーク、「それぞれの宮澤賢治」展、甲府YWCA、福岡女学院教会女性の会、会津マスコワイア、日本福音ルーテル稔台教会、千里聖愛教会、日本キリスト教婦人矯風会四国部会、共同世界宣教(CGMB)、箕面教会、四街道教会婦人会、大阪聖和教会、若松聖愛幼稚園、久米田教会、甲子園教会、日本キリスト教婦人矯風会徳島、伊丹教会日曜学校、天使幼稚園

■支援品

中村純子、札幌北部教会、利別教会、熊野ナオミ、太平こどもの家、東洋英和女学院小学部

■署名のご協力に感謝いたします

各団体から署名感謝の言葉が届いています。引き続きのご協力をお願いいたします。

▶ 今年 9 月に学生の方々が 2 組来館して、センターの活動や原発事故、現在の状況などの話に耳を傾け、思い



を寄せてくださいました。コロナ禍になってからスタディーツアーなどのお客様をお迎えすることができなかったのが、久しぶりに嬉しい時を過ごしました。感染症対策をしつつ、またお客様をお迎えできたらと思います。

■ 2022 年 10 月～2 月の活動報告と予定 ■

■ 10 月

- 8 日 来館：井上真歩さん 小家石航さん
- 12 日 センター役員会
- 13 日 センター会計監査
- 21 日 報告：立教大学院キリスト教学科 3 名 片岡輝美
- 22 日 会津放射能情報センター第 12 回総会
会場 14 名、オンライン 10 名
- 22 日 海といのちを守るタウンミーティング in 会津
23 名 柴崎直明氏
- 25 日 来館：渡辺一枝さん 今野寿美雄さん他 2 名
- 29 日 経産省東電交渉：これ以上海を汚すな！
市民会議 100 名 いわき市 片岡輝美

■ 11 月

- 1 日 会津放射能情報センター NEWS 第 40 号発行
- 6 日 報告と懇談：ふくしまこうべ子どもプログラム
- 11 日 ホットスポットファインダー測定 北会津町
- 14 日 子ども脱被ばく裁判第 5 回控訴審期日 仙台高裁
- 18 日 ホットスポットファインダー測定 大戸町
- 24 日 お話：捜真小学校 180 名 片岡輝美
- 25 日 第 3 回小出裕章氏講演会実行委員会 三春町

■ 12 月

- 2 日 汚染水の海洋放出に反対する『関係者の声』
ハガキワークショップ 片岡輝美
- 3 日 センター役員会
- 12 日～13 日 浜通り視察：CGMB: 共同世界宣教 3 名
片岡謁也 高橋真人 片岡輝美
- 17 日 放射能で海を汚すな！国際フォーラム
～環太平洋に生きる人々の声 片岡輝美
- 23 日 今田かおる医師のおしゃべり会と
甲状腺エコー検査
- 24 日～1 月 5 日 センター冬期休館

■ 2023 年 1 月

- 8 日 セシリア・ヒメネスダマリー国連特別報告者の
聴き取り調査報告会 片岡輝美
- 11 日 東電刑事裁判高裁判決 仙台高裁
- 21 日 小出裕章氏講演会 田村郡三春町
「原発汚染水はなぜ流してならないのか」

■ 2 月

- 1 日 子ども脱被ばく裁判「子ども人権裁判」判決

■ ホームページをご覧ください ■

センターや関連する団体による様々な情報、ML で代表の発信する「福島原発核事故関連情報」、ホットスポットファインダーで測定した「放射能測定地図」等を掲載しています。センター NEWS のバックナンバーもご覧いただけます。

■ ML (メーリングリスト) に登録を ■

代表による「福島原発核事故関連情報」やセンター主催の学習会や催し等の案内を一斉配信しています。登録を希望される方は、info@aizu-center.org宛メールで、件名「ML 登録希望」本文に氏名を記入して送信してください。

■ センター会員募集と年会費納入のお願い ■

10 月より第 12 期に入りました。年会費の納入をお願いします。振込先 ゆうちょ銀行
記号 02270-2 番号 116030